

深刻さを増す父親問題

現代における父親の問題は、非常に深刻である。

近年、とみに増加しつつある登校拒否症や家庭内暴力は、その深刻さを如実に物語っているといえる。

父親はどうあるべきかという問題は、欧米諸国でもむずかしい問題として受けとめられているが、わが国においては、いつそう困難なことと思われる。

というのも、わが国の文化は、もともと母性的な要素をもって成り立ってきたという歴史があるからである。

人間の心には多くの相対立する原理が働いているが、そのなかでも父性と母性の原理の対立は、人間にとてまことに重要なものである。この対立する原理のバランスの取り方によって、その社会や文化の特性がつくり出されてゆくと考えられる。筆者は一個の臨床家として、あくまで個人を対象とした個人の心理療法にあたっているものではあるが、その個人の心の中に彼をとりまく社会や文化の在り方が反映されていると感じることが多い。そして、以後に例をあげて論じるように、最近わが国において急増してきた登校拒否症や、あるいは、わが国に特徴的と言われている対人恐怖症の人たちに接している間に、その背景にわが国の母性文化の特質というものが存在していることを痛感するようになった。これらの事例においては、自我の確立の問題が大きい比重を占めているが、そのこと自体が日本の母性文化に根ざしたものであると考えられるのである。

母性の原理は「包含する」機能によつて示される。それはすべてのものを良きにつけ悪しきにつけて包みこんでしまい、そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ。「わが子であるがぎり」すべてに可憐いのであり、それは子供の個性や能力とは関係のないことである。

しかしながら、母親は子供が勝手に母の膝下を離れることを許さない。それは子供の危険を守るためにもあるし、母一子一体という根本原理の破壊を許さぬためといつてもよい。このようなとき、時に動物の母親が実際にすることがあるが、母は子供を呑みこんでしまうのである。かくて、母性原理はその肯定的な面においては、生み育てるものであり、否定的には、呑みこみ、しがみつきして、死に到らしめる面をもつてゐる。

これを余りにも単純で抽象的な説明とするならば、ユングが母性の本質として述べている三つの側面をつけ加えて考えてみると、もう少し具体的となるだろう。彼は、母性の本質として、慈しみ育てること、狂宴的な情動性、暗黒の深さ、をあげている。ここに、暗黒の深さは何ものも区別しない平

等性と、すべてのものを呑みこむ恐ろしさを示している。狂宴的な情動性は、かつてギリシアにおけるディオニソスの教団が行つたような、すべてのものが等しく自然のままの衝動の動きを体現することを示している。

これに対しても、父性原理は「切斷する」機能にその特性を示す。それはすべてのものを切斷し分割する。主体と客体、善と惡、上と下などに分類し、母性がすべての子供を平等に扱うのに対し、子供をその能力や個性に応じて類別する。極端な表現をすれば、母性が「わが子はすべてよい子」といふ標語によって、すべての子を育てようとするのに対して、父性は「よい子だけがわが子」という規範によつて、子供を鍛えようとするのである。父性原理は、このようにして強いものをつくりあげてゆく建設的な面と、また逆に切断の力が強すぎて破壊に到る面と、両面をそなえている。

このようないわば相対立する二つの原理は、世界における現実の宗教、道徳、法律などの根本において、ある程度の融合を示しながらも、どちらか一方が優勢であり片方が抑圧される状態で存在しているのである。筆者は松本滋氏と同じく、日本の傾向は母性的な面を優勢とすると考えている。

六 精神文化

情緒的パターン

日本の中産階級の母親は今日ではほとんど核世帯、すなわち自分の両親や夫の両親からわかれて住んでいるので日本の伝統的な育児について知らないことが多い。また、たとえ知っていたとしてもその伝統的な育児は古くさいとか「封建的」だとして、しりぞけてしまつて用いようがない。その結果、育児法についての出版物が大きな産業となりいろいろな専門家が、自分こそがもつとも近代的で科学的だと主張して、迷える母親に相反した方法をすすめているのである。親が切実に求めていた専門家のアドバイスは、新聞、週刊誌、ラジオ、テレビ番組のようなマスコミを通じて流されている。専門的なアドバイスがそここにあふれているので日本中、あるいは隣近所という限られた地域の中でも、いろいろ違つた育児方法がみられる。たとえば母乳よりも人工栄養の方がよいという人、赤ちゃんをベビーサークルに入れるのを好む人嫌う人。早期離乳を主張する人反対する人などがいる。ボーゲルが指摘しているように、いろいろなバラエティーがあるにもかかわらず、それでもなおかなりはつきりした日本式育児体系とよべるよう

なものがみられ、このような日本式育児はアメリカの育児法とかなりかけ離れている。そして、それが日本人のペーソナリティ形成の基礎をなしているのである。ペーソナリティの複雑な構造の中からここでは対人関係の中での感情の処理方法を取り出し分析してみよう。というのは、それが日本人のペーソナリティの重要な構成要素となつていてある。ここでいう情緒とは、は、対人関係の中でのごくふつうの自分の感情や気持をさしている。ここで問題にするのは、他人にたいして怒りや恐れのような激しい感情を示す場合ではなく、他人にたいして自分の気持をうまく処理していく日常の感情である。情緒発達は、授乳のしかたや離乳のしかただけによるのではなく、親子関係の行動パターンの積み重ねを通じて発達するものであるという立場に立つ。そして、このことが感情を処理するときのひとつの処理のしかたをつくり出しているのである。このために二、三の習慣を集中的に検討するよりも、むしろ幼児期からのいろいろな育児習慣を検討することにしたい。

静かで落ちついた幼児期 まずははじめに赤ちゃんの行動を検討してみることにする。わずか生後数カ月の赤ちゃんの行動がすでに文化的に条件づけられているという事実がある。コーディルとワインスタインは日本とアメリカにおける中間階級の母子の間での相互作用を比較研究した(Caudill and Weinstein, 1969)。その結果誕生後三四カ月すでに日本とアメリカの赤ちゃんは異なる行動をすること、またそれぞれの文化では、母親と赤ちゃんの間にかなり違った相互作用があることが明らかにされた。

この研究の中でもとりわけ顕著なものは、アメリカの赤ちゃんは一人で置いておかれることは多く、とくに身体的な運動が活発で、日本の赤ちゃんよりも声を出してひとりごとをいったり、母親に意味のある話しかけをすることが統計的に多いということである。一方、日本の赤ちゃんはアメリカの赤ちゃんよりもだだをこねたり、むずかたりして母親になだめられる傾向がある。アメリカの母親は赤ちゃんを軽く叩いたり、ねている位置をかえたり肉体的に刺激を与えたり、話しかけたりして日本の母親よりも赤ちゃんにもっとほつきりしたかたちで愛情を示す傾向がある。日本の母親はアメリカの母親のように強い肉体的刺激を与えていたりしないで、赤ちゃんを静かにゆすってあやすのである。赤ちゃんの行動や母親の育児にはこうした差があり、早くも成長後の日本人とアメリカ人のパーソナリティの差はすでにこの頃から示されている。たとえばアメリカの赤ちゃんは、いつも一人にしておかれるので、自分一人で情緒の安定をはからなければならないことを自然に身につけるのである。これにたいして日本の赤ちゃんは母親に頼つて情緒を安定させようとする。この差については後でもっと詳しく述べることにする。もうひとつ大きな差はアメリカで行なわれた調査によると、母と子の相互作用は言語反応と子どもの身体的活動を刺激する傾向があるということである。それにたいして、日本における母と子の相互作用は活動の点でも言語の点でも、むしろ少なく、そのかわりに赤ちゃんをなだめたり、あやしたりする場合が多い。くりかえせば、このような差が成長後のアメリカ人と日本人のペーソナリティの差を生み出すのである。つまりアメリカ人は日本人よりもずっと言語能力を重要視している。

理想的な日本人像は、それ自身が時代とともに変化してはいるものの無口な人で自分がやろうとしていることを言葉で約束するよりもむしろ行為を通じて表わし、不平をいわす耐えしのぶタイプの人である。要するに日本人の性格にみられるこの非言語的なものの強調は幼児期のごく初期から始まっているように思われる。赤ちゃんを膝にのせ、あまり話しかけもせず、静かにゆすってあやしている日本の母親の姿は、母親や親しい人と一緒にいて直接身体的接觸を保つことが情緒を安定させるために大切であると思つてゐる日本人の考え方と関係があると思われる。このような母と子の相互作用の中にすでに強い情緒的な依存関係の始まりがあることはあまりない。りがみられる。それでは日本の子どもはどうして母親にたいして、このように強い肯定的な感情を発達させるのであるうか。そのような感情は、



6 精神文化
官参の産着をきた赤ちゃん

大部分が母子関係の中で発達していくのである。日本では母親の愛情を抑制したり、母子関係に不安をいたかせたりするような行為は、できるだけひかえられている。すわたち、(一)しつけのため罰を与えたたり、(二)子どもを一人ぼっちにしたり、また見知らぬ人に子どもをまかせたりすることはできるだけ避けられるのである。それにくらべて、アメリカの育児ではこれらを効果的に用いているので子どもに不安をうつかけがちである。アメリカの子どもにとって親は不安の源であるから、その結果アメリカの子どもは情緒の安定を親にあまり頼らないでもよいように早くから学習し、自分自身の情緒は自分の問題として処理するのである。これらのこととふまとめて日本人の育児様式をみるとことしよう。アメリカの育児と外的または内面的な比較をすることによって先に述べたようだ、日本とアメリカの対照的な面が明らかにされるだろう。

四

自律授乳によ
アメリカにおけるベンジャミン・スパック博士のような名声を日本で博している
小児科医松田道雄博士は、何世紀にもわたる経験にもとづいて発達した、伝統的情緒的依存

な日本の育児方法を合理的であるとして高く評価している。たとえば松田氏(一九六四年、一一七二ページ)によれば赤ちゃんが泣いたときには、たとえ深夜でも授乳すればよい

と述べている。松田氏は、きちんと時間をきめて授乳するやりかたにたいして、欲しがるときに与える伝統的な日本の習慣を擁護しているのである。時間に従って授乳するやりかたは近代初期に日本に導入されたが最近にいたるまで普及はしなかった。時間に従って行なう授乳では、赤ちゃんはおなかを空かせて泣き、空腹から生じる情緒的緊張を赤ちゃん自身で何とか処理させようとするのである。アメリカの赤ちゃんは、部屋の中に一人でおいておかれるので、一人でいる不安と戦うことを学ばねばならない。アメリカ人は自分の情緒の問題を自分で処理する能力をもち、この情緒的独立が個人主義イデオロギーに象徴されている社会での独立的心理的な支えとして、側に立つて注目する必要がある。他方、欲しがるときに与える自律授乳は反対の効果をもたらす。なぜなら情緒的独立をうながすのではなくて、ますます母親にたいして情緒的依存を高めるようにしむけているといえよう。

就寝 日本では子どもがねるときに、同じような甘やかしが行なわれている。アメリカでは子ども

母親の手で一人にされることがないので、母親が潜在的不安の原因となることが少ないのである。ベビーシッターは、子どもにとって親と同じ意味で同じ程度に情緒的安定の源とはならないのである。アメリカの子どもにとってベビーシッターと残されることとは辛い経験であり、泣いたりときには癪癪をおこすこともある。しかし、ともかく子どもはこの状態に順応することを学び、安心感の源である親が一時的にいなくななり、侵入してきた他人どうまくやつていくことを学ぶのである。

五

要約すると、日本の親とアメリカの親との間のこうした対照的な態度をみると、日本の母子関係はストレスを少なくする。一方、相対的にいってアメリカの子どもはストレスの生じやすい状態にある。その結果、日本の子どもは母親にたいして強い肯定的な感情をもつようになり、母親からの否定的感情にあうことは少ない。これに反して、アメリカの子どもは母親から肯定的、否定的双方の感情を得てるので、母親にたいして二律背反的な感情をもつようになるのである。

小学生の子どもをもつ日本の母親は、いろいろなことをしてみても子どもがいうことを聞かないときには、ときには学校の先生に忠告してくれるよう依頼する。母親が先生の所へ来て、子どもに注意を与えてくれるよう頼むと、先生は子どもに注意を与えて母親を助けるのは自分の当然の役割だとする。このように依頼するのは、母親が直接叱責や罰などを与えて子どもにおぼす否定的な効果を避けるためである。また、このような依頼をするのは先生といいものは子どもからみて、局外者であり、比較的遠い存在なので、感情面からいえば先生と生徒といい関係をこわさずに注意叱責ができるためである。そして同時に先生は生徒にたいして威厳的な地位にある

よい子にしていないとき、日本の親は超自然的な制裁の脅威、たとえばおばけ、人食い鬼、悪魔などが出てきて、いふことを聞かない子をおどすとか、神様のばちがあたるとかいう(Lanham, 1956, p. 576)。もうひとつよく使われる手は、恥ずかしいということである。親は近所の人や友だちがおまえのいたずらを笑いますよといつて子どもをたしなめる。今ではあまり使われていないが、昔よく使われた第三の方法は、おまわりさんが来ていたずらをする子をつかまえるという手であった。親が直接手を下して罰を与えるのとくらべて、このような叱り方は特別の意味がある。それは罰や不安の原因が親以外の所にあり、まるでアメリカの親が家の外は自動車で危いと子供に教えるような調子で、世間がどのようなものであるかを子供に教えているという点である。どちらの場合にも、外界が危険なものであってもそれは親のせいではない。アメリカの親がスピードの速い自動車に責任がないように、日本の親も恐怖感をおこさせるお化けなどに責任はない。しかし、自分の子どもが通りへ飛び出すのをみたアメリカの親はただちに子どもに罰を与えて、子どもの不安感の的となるであろう。しかし日本の親はいたずらをする子にたいして、超自然的な存在の恐ろしい行動をくりかえし、いってきかせるだけである。

人にされる不安を比較的経験しない。日本の母親は情緒を満たす源であり、アメリカのように